



第92回  
キネマ旬報ベスト・テン  
文化映画 **第1位**

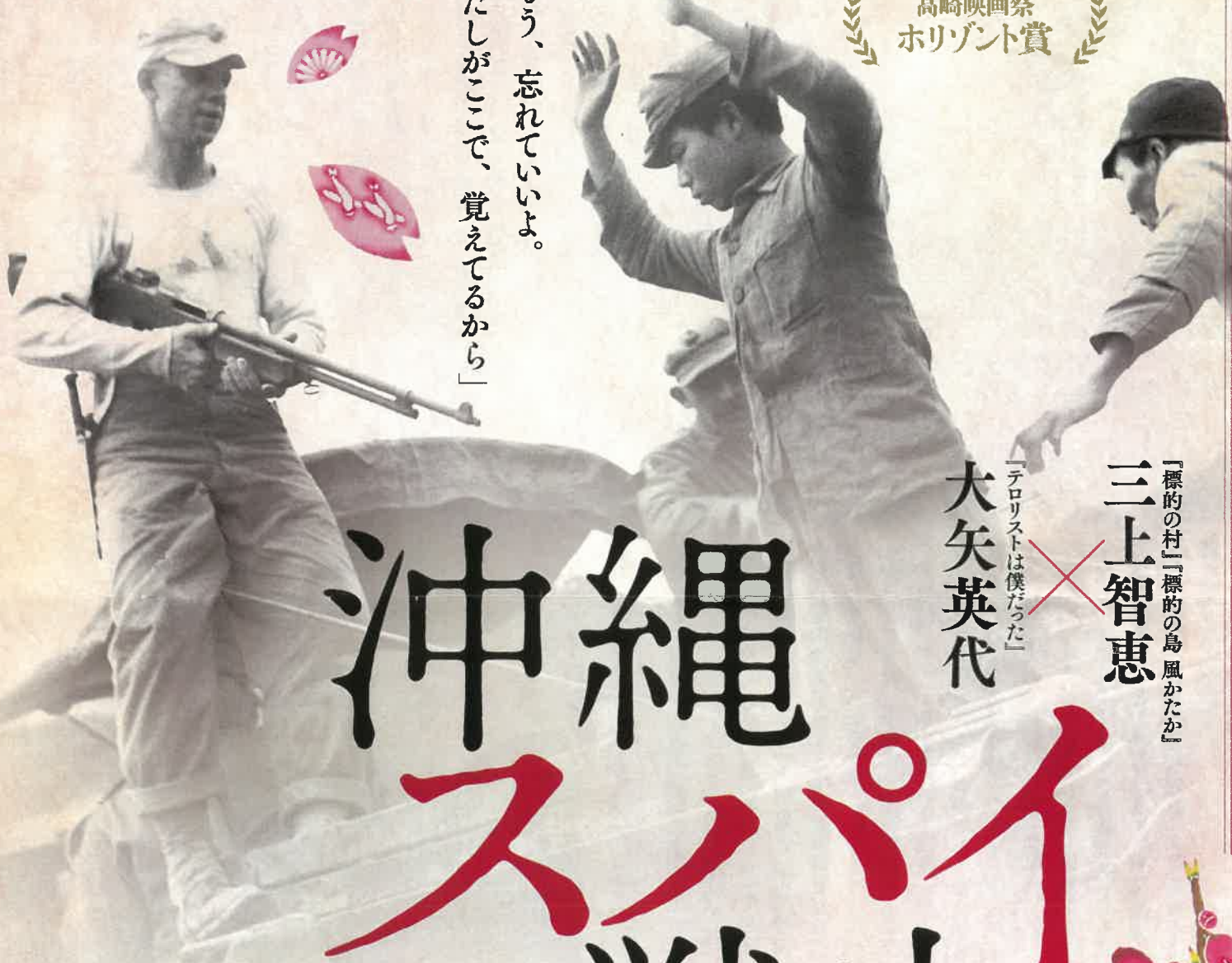
日本映画ペンクラブ賞  
2018年  
文化映画部門 **ベスト1**

第42回  
山路ふみ子映画賞  
**文化賞**

第24回  
平和・協同ジャーナリスト基金賞  
**奨励賞**

第33回  
高崎映画祭  
**ホリゾント賞**

「もう、忘れていいよ。  
わたしがここで、覚えてるから」



『標的の村』『標的の島風かたか』  
**三上智恵**

『テロリストは僕だった』  
**大矢英代**

# 沖縄 スパイ 戦史

監督:三上智恵、大矢英代  
プロデューサー:橋本佳子、木下繁貴  
撮影:平田守 編集:鈴尾啓太 監督補:比嘉真人 音楽:勝井祐二  
協力:琉球新報社、沖縄タイムス社  
製作協力:沖縄記録映画製作を応援する会  
製作:DOCUMENTARY JAPAN、東風、三上智恵、大矢英代  
配給:東風  
2018/日本/DCP/114分/ドキュメンタリー

ふたりのジャーナリストが迫った沖縄戦の最も深い闇。  
少年ゲリラ兵、戦争マラリア、スパイ虐殺……  
そして、ついに明かされる陸軍中野学校の「秘密戦」とは？

[www.spy-senshi.com](http://www.spy-senshi.com)

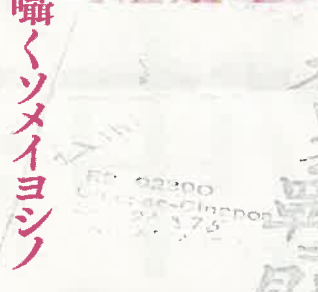
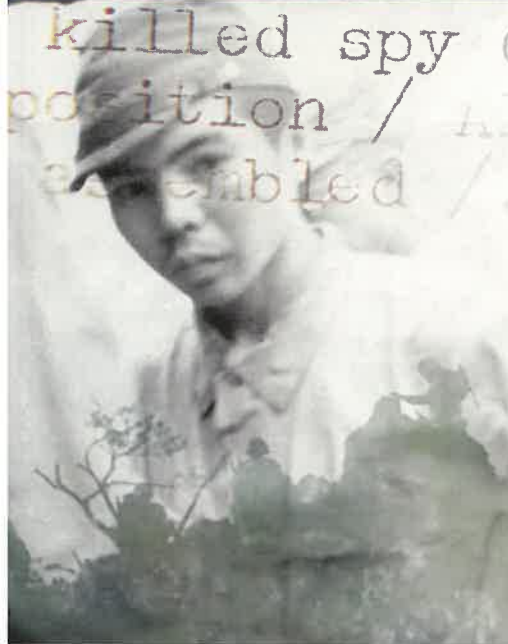




# 戦後70年以上語られなかった 陸軍中野学校の「秘密戦」、 明らかにするのは過去の沖縄戦の 全貌だけではない。

第二次世界大戦末期、米軍が上陸し、民間人を含む20万人余りが死亡した沖縄戦。第32軍・牛島満司令官が自決する1945年6月23日までが「表の戦争」なら、北部ではゲリラ戦やスパイ戦など「裏の戦争」が続いた。作戦に動員され、銃を持ち故郷の山に籠って米兵たちを翻弄したのは、まだ10代半ばの少年たち。彼らを「護郷隊」として組織し、「秘密戦」のスキルを仕込んだのが日本軍の特務機関、あの「陸軍中野学校」出身のエリート青年将校たちだった。

1944年の晩夏、42名の「陸軍中野学校」出身者が沖縄に渡った。ある者は偽名を使い、学校の教員として離島に配置された。身分を隠し、沖縄の各地に潜伏していた彼らの真の狙いとは。そして彼らもたらした惨劇とは……。



「散れ」と囁くソメイヨシノ  
「生きる」と叫ぶカンヒザクラ

長期かつ緻密な取材で本作を作り上げたのは、二人のジャーナリスト。映画「標的の村」「戦場ぬ止み」「標的の島 風かたか」で現代の闘いを描き続ける三上智恵と、学生時代から八重山諸島の戦争被害の取材を続けてきた若き俊英、大矢英代。

少年ゲリラ兵、軍命による強制移住とマリア地獄、やがて始まるスパイ虐殺……。戦後70年以上語られることのなかった「秘密戦」の数々が一本の線で繋がるとき、明らかにするのは過去の沖縄戦の全貌だけではない。

映画は、まさに今、南西諸島で進められている自衛隊増強とミサイル基地配備、さらに日本軍の残滓を孕んだままの「自衛隊法」や「野外令」「特定秘密保護法」の危険性へと深く斬り込んでいく。

醒めました！  
僕ら日本人は、あの日本の戦争に就いて、未だ未だ何も知らない、知らされていない。知らぬ事は罪。これは日本人、否世界の人間共にとって、必見の一作!!  
立派な作業に、頭を垂れます。目醒めよ!

**大林宣彦** (映画作家)

あの戦争は、地続きだった。沖縄と、本土と。過去と、今と。それを断絶しているのは意図的に作られた壁が、それとも無関心という清なのか。背を向ければ、再び地獄は忍び寄る。生き抜いた人々の声は、私たちへの警鐘そのものだった。

**安田菜津紀** (フォトジャーナリスト)



2019年9月20日(金) ①10:30~ ②14:00~ ③18:30~  
竹の塚地域学習センター4Fホール (足立区竹ノ塚2-25-17 東武線竹ノ塚駅徒歩10分)

料金 大人:1000円 高・大800円  
中学生以下 無料

◆主催/映画「沖縄スパイ戦史」上映実行委員会  
《連絡先》足立区西新井栄町2-13-8 tel 3840-0297